

## 聖トマス寮の思い出

われわれ16期生が中1生として聖トマス寮旧館に入ったのは、昭和43年4月である。愛光学園の旧校舎は、古町から国鉄松山駅に向かう市電の線路を隔てた向かい側にあった。母と妹と一緒に来たが、「元気でおやりよ」とだけ言ってあっさり帰ってしまったので急に寂しくなった。

高2の途中から校舎は衣山に移転した。寮はそのまま宮田町に残ったから、卒業までの1年あまりは山をこえて毎日歩いた。私はその後も大学1年から博士課程2年の初夏頃まで、東京大森にある聖ドミニコ寮で過ごしたから、寮生活は合計13年余にもなった。そのあと1年ほど千駄木のアパートに住んだが、一人暮らしは苦手だったのですぐ結婚した。

朝は7:00起床、ラジオ体操、食事、登校。夕方は5:00夕食のあと、5:30~7:30と8:00~10:00の合計4時間の勉強、就寝の準備をして10:20に布団に入る。11:00になると神父さんが有無をいわずおおもとのブレーカを切る。ドンという音とともに真っ暗になる。これが中1から大学受験まで変わることなく繰り返された。丹原の田舎に帰っていても律儀に守った。

リズムは五臓六腑に染みつき、今でも、夕方7:30になると一息入れたくなる。8:00になると10:00まで一気に仕事をしてしまう。大学の自室にいると必ずそうなる。それから帰宅する。消灯がなくなっただけである。

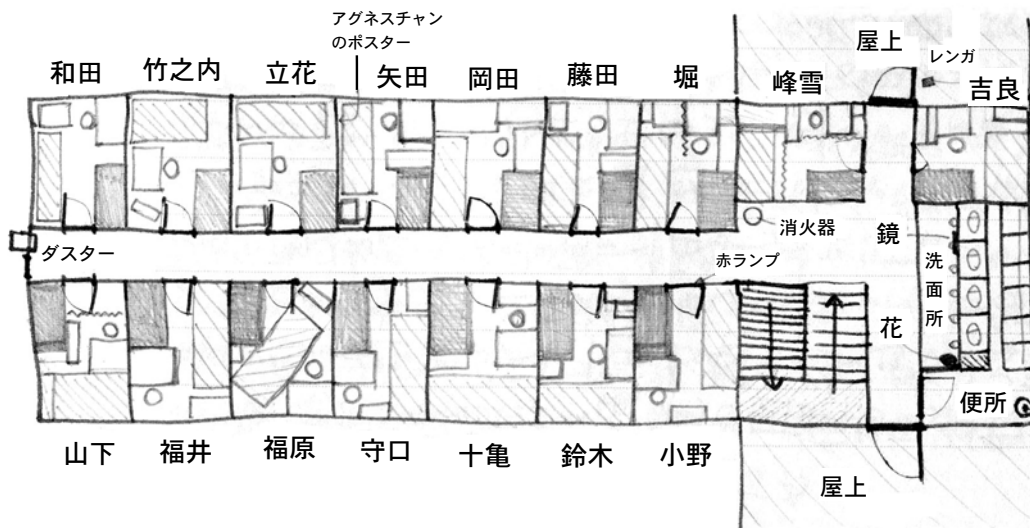
寮の旧館にはコンセントがなかった。蛍光灯は壁と天井に付いていた。暖房も冷房もなかった。途中から30ワットの足温器の使用が認められたが、峰雪君はそれももったいないと言ってヒータ部分はずし、蓑虫よろしくぴょんぴょん跳んでいた。

ラジオやテープレコーダは禁止されていた。私はラジオを作って本棚の裏に張り付けた。カモフラージュのために部品をばらばらに配置し電線をつないだ。長くしていい配線と、長くしてはいけない高周波の配線のいい勉強になった。小野君が放送局を作ろうとって真空管で作った。こちらはラジオトーマスです、などとやっていたら、郵政局から電話が来て叱られた。ワンターンコイルで豆電球がピカピカ灯っていたから結構出力も出ていただろう。父も勤めていた松山郵政局のアンテナは寮の窓からすぐそこに見えていた。（父は中学2年のとき、札の辻で交通事故で亡くなった。）

記憶は定かでないが、高2か高3のころ真空管のテレビを拾ってきた。直して部屋に備え付けて大岡越前を見ていた。岡本神父様がもれ聞かれて、今のはテレビの主題歌ではないかとおっしゃるので、気のせいですなどと言ったのを覚えている。おめでたいことに、

ばれていないだろうとずっと思っていた。しかし、寮の部屋に鍵はなかったので、神父様方は先刻ご承知だったはずである。いよいよ寮を出る頃に、伊崎寮母さんが、「規則ではいかんことはわかっどるけど、とりあげたらあなたの才能をつぶすしねえ」と言われた。

聖トマス寮には16期生16人が最後まで残り、梁山泊を気どって本館3階（最上階）に居を構えた。昭和49年の年が明けると、一人、二人と去っていった。主を失った部屋は意外に狭く寂しげであった。ここから高貴な魂が巣立ったのだ、という言葉が頭の中を去来し、感無量であった。やがて自らも、語り尽くせぬ思い出とともに、万感の思いで寮を去る日が来た。丹原に帰るバスのなかで、私は泣いた。これは旅立ちなんだ、と自分にいい聞かせたが、堰を切ったように流れ出した涙はなかなか止まらなかった。



16期生16人の部屋の配置図（聖トマス寮本館3階）

1974.2.7の日記より。田舎に帰ってそらで書いたもの。文字はワープロで上書きした。

堀 洋一（東京大学，16期）